

筆山

第37号 / 2004年12月

土佐中・高等学校同窓会 関東支部会報

編集人/西岡 恒憲(41回)

編集室：〒106-0032 港区六本木3-16-12-7F 六本木司法書士合同事務所気付 編集委員 鶴和千秋(41回)
TEL 03-3587-6200 FAX 03-3587-6201 E-mail: tsuruwa@rsg.gr.jp

関東支部ホームページ: <http://www.tosako-kanto.org/>



巨大台風23号一過後の高知市

坂の上の新しき雲

公文 俊平(28回生)

「失われた15年」などと呼ばれた混迷と停滞の時期もようやく終りをづけ、日本はいよいよ明治以来三度目の長期発展局面に入ろうとしている。その兆候はすでにいたるところにみられる。

振り返ってみると、30年ほど続く日本の長期的な発展は、一八八〇年代の半ば以来、ほぼ60年ごとにもみられた。最初が、司馬遼太郎氏のいう「坂の上の雲」を見つめて、近代国家建設の道を駆け上った戦いの30年だった。その次が、敗戦の焼け跡から立ち直って、高度経済成長の過程を驚進した競争の30年だった。どちらの場合も、輝かしい成功の後に、暴走、混迷、停滞の30年が続き、日本は、天谷直弘氏のいう「坂の下沼」にすべりおちていったのである。そしていま、日本の前に開けているのは、「情報化」が生み出す知力や文化力を梃子とする共働を通じて、「地域化」と「地球化」を達成する新しい発展経路である。

過去の長期的発展の枠組みは、新しい憲法によって準備された。明治憲法と昭和憲法がそれである。次の発展の枠組みも、今後数年のうちに制定される可能性が高い新憲法によって準備されるだろう。新憲法によって日本が連邦国家として生まれ変わり、各「邦」がそれぞれの独自性と主体性を発揮する中で、地球社会との新しい連携の体制が作られていくことを、私は強く期待している。

明治の発展に果たした土佐人の貢献は、はかり知れないほど大きかった。それに比べると昭和の発展の中の土佐人の役割は、残念ながらいささか霞んでいる。次の発展局面では土佐人たちに、とりわけわが母校の後輩たちに、もう一度大きな役割を演じてほしいものである。

岡村甫学長(32回)の率いる高知工大は、すでに異彩を放っている。南国市の地域情報化では、高知高専の今井一雅さん(48回)たちが八面六臂の活躍を見せている。もともと多くの人が、もともと多くの分野で、新しい共働のハブとして活躍してくれることを願う。

第3回 土佐高同窓会関東支部 若手の会 趙詣(77回生)

去る平成16年10月9日(土)日に、東京青山に位置する「The Soul of Seoul」において、第3回目となるTOSA 70's Party(土佐高校同窓会関東支部若手の会)が開催されました。この集まりは関東在任の70回生から今春土佐高校を卒業した79回生までの70回代の若手卒業生同士の交流を深める目的で一昨年から始まった企画です。

今年の会場は「The Soul



後日開かれた「Party 反省会」でのスナップです。

「The Soul」という名前、料理を中心としたお店でした。当日の料理としては各種の焼肉や麺、チヂミ、韓国風サラダなどが、味・量ともに申し分ない内容でした。お店の内装はバリ島などのアジアリゾートを意識した雰囲気となっており、ゆったりくつろぎながら談話するのに最適でした。



今回のTOSA 70's Partyは前回や前々回の同窓会とは少し様相の異なるものになりました。というのも、今回の集まりについては、かねてから天候について心配していたのですが、不運にも当日に台風22号が関東地域に上陸することになったからです。そのため、案内状の開始時刻の午後6時になっても小数の方々し

か集まりませんでした。これを受けて、幹事陣は急遽、開始時刻を遅らせるという対策にしました。その後、その狙いが当たったのか、雨や風は次第に止むようになり、参加者の方々もそれによって増えてきました。私は今回の集まりが少数であったことが逆に良かったのではないかと思います。人数が比較的少なかったので、同じ卒業年度の者でかたまらず、様々な同生の方々とゆつくり語りうことができたからです。また、当日の台風のため、会場はお店の御厚意により、かなり遅くまで使うことができました。そのため、会場にいらした皆さんはいろいろな方々と親密な交流ができた満足してしまいました。実際、私も以前お話をしたことがある方々や初めてお会いした方々と多岐にわたって交流をすることができました。2次会には皆さんの積極的な声掛けが奏功してか、1次会とほぼ同数程度の参加者となりました。私は残念ながら2次会の最後まで参加できませんでしたが、皆さんの距離が1次会の時よりもさらに縮まったように思われまし

た。

私は例年の同窓会などでいつも土佐高の絆の強さを感じてきましたが、今回のTOSA 70's Partyでは特に強くそれを感じました。殊に、今回の参加者は、台風の中にもかかわらず駆けつけて下さった方々ばかりですので、一種の連帯感のようなものも感じます。今回の集まりで、土佐高の絆の強さを見せてくれた参加者の方々にはとても感謝しています。ありがとうございました。また、今回も同窓会関東支部幹事長の市川直介さん(53回生)が来てくださいました。市川さんにもこの場をお借りしてお礼を申し上げます。



[母校及び同窓会本部・各支部一覧表]

- 土佐中学・高等学校 事務局 千頭裕 〒780-8014 高知市塩屋崎町1-1-10 (TEL)088-833-4394(FAX)088-833-7373(E-mail) tosa@tosa.ed.jp(HP)http://www.tosa.ed.jp/index.html
- 土佐中学・高等学校同窓会本部 会計幹事 千頭裕 〒780-8014 高知市塩屋崎町1-1-10 (TEL)088-833-4394(FAX)088-833-7373(E-mail) tosa@tosa.ed.jp(HP)http://www.tosaobog.com/
- 土佐中学・高等学校同窓会香川支部 事務局長 武山正人(担当:大石浩) 〒761-0113 高松市屋島西町1850-1 四国電力(株) (TEL)070-5750-2120(FAX)087-841-7809(E-mail)ooishi11737@yonden.co.jp
- 土佐中学・高等学校同窓会広島支部 事務局長 山崎迪子 〒732-0062 広島市東区牛田早稲田1-24-7-210 (TEL)082-227-2656(FAX)082-227-2656(E-mail)myamazaki@dion.enjoy.ne.jp(HP)http://www.geocities.jp/hiroshimashibu/
- 土佐中学・高等学校同窓会関西支部 事務局長 原田和人 〒530-6001 大阪市北区天満橋1-8-30 OAPタワー1F アリコジャパン内 (TEL)090-1073-7822(E-mail)harada73@hotmail.com(HP)http://www.tosa-ko.org/kansai/
- 土佐中学・高等学校同窓会東海支部 事務局長 神宮美恵子 〒468-0075 名古屋市天白区御幸山1201 御幸山パークマシオン B-301 (TEL)052-837-5834(FAX)***** (E-mail)jjingu-m@crux.ocn.ne.jp(HP)http://tosakotokai.web.infoseek.co.jp/
- 土佐中学・高等学校同窓会関東支部 事務局長 金澤由里 〒251-0875 藤沢市本藤沢7-3-7 山中和正(24回) 気付 (TEL)0466-82-2445(FAX)0466-82-2445(E-mail)tosako-kan.toshibu@mail.ne.jp

関東支部活動報告

幹事長 市川直介(53 回生)

関東支部では、平成16年5月30日の支部総会で承認された泉谷新支部長を中心に新たな活動をスタートさせました。7月1日の一木会では、新旧支部長のご苦労さん会と激励会を催しました。新支部長の同期生である29回生もたくさん駆けつけ、土佐酒造が久々の貸し切り状態となりました。まず、重要なお知らせです。夏から秋にかけて、平成17年度の関東支部総会・大懇親会の会場について検討してきました。今年まで使用していた青少年オリンピックセンターが独立行政法人となり、予約が非常に難しくなりました。そのため、会場に関する情報を同窓生から得て検討した結果、来年度の関東支部総会・大懇親会は、日時は平成17年5月28日(土)午後4時から、場所は市ヶ谷にあるホテルグランドヒル市ヶ谷で開催することになりました。詳細は、別途ご案内いたしますが、開始時刻も開催場所も変更になりますので、注意してスケジュール

ルを押さえていただければと思います。母校の先生方も、午前中の授業を終えて、駆けつけられる時間となりました。次に、本部・他支部との交流ですが、8月14日(日)に開催された母校本部総会には、泉谷新支部長をはじめ多くの関東支部関係者が出席しました。今年は、開催場所が母校土佐高となりました。「ホームカミング」の色彩を強く出し、懐かしい恩師の特別授業を行うなど様々な行事を組み合わせて非常に楽しい一日でした。また、7月3日には浅井顧問らが香川支部総会に出席しました。支部総会の当日に香川支部の萩野幹事とゴルフと野球談義を楽しみ、その場で会場の高松シンポルタワーにいきました。高松シンポルタワーは、屋島を含む瀬戸内海が一望できる場所で、絶景を見ながら懇親を深めました。11月6日には山中副幹事長、西岡編集長が広島支部総会へ出席し懇親を深めました。様子は、関東支部のホームページで写真が掲載されています。また、10月9日には、70回生代の若手同窓生のパーティーを開催しましたが、運悪く大型台風の直撃をつけました。

それでも、ずぶぬれの中20名余りが駆けつけ、楽しくおいしい焼肉をつまみました。さて、母校の高校野球部が秋の四国大会に12年ぶりに出場しました。結果は、準決勝で西条高校にコールドで完敗しました。一連の試合結果や進行状況が関東支部のホームページにタイムリーに掲載されていました。久々にどきどき、否、胸が詰まる思いで試合経過を見ていました。まだまだ甲子園への壁は厚いと思うのと同時に、乗り越えるべき壁がやっと思えてきたの思いがあり、監督に就任するまで関東支部にいた高多監督には更なるエールを送りたいと思います。

関東支部のホームページへのアクセス数は、その魅力のおかげで、今年11月初めの段階で既に2万件を超えています。また、今年度は、名簿担当の川上司さんの尽力で関東支部名簿を発行いたします。筆山もとても充実したものになっています。これらは、大変忙しい中、同窓生が同窓会に對し熱い思いを持って行なっていたに思っています。本当に感謝申し上げます。今年、高知をはじめ日本列島に大型台風がこれでもかというほど上陸したうえに、新潟中越大地震が起こりました。被害にあわれた方には、心からお見舞い申し上げます。平成17年は、母校や同窓会にとつても、一層充実した年にしたいものです。今後とも、よろしくご指導のほどお願いいたします。

母校だより

学校長 池上武雄(28 回生)

はや今年も立冬の季節となりました。関東支部の皆様にはお元気で活躍のこととお慶び申し上げます。今年はお風の頻繁な上陸や新潟中越地震など色々な災害が連続して報せられております。皆様のところは如何でしょうか。お見舞い申し上げます。平素は母校の為に格別のご支援を賜わり有難く厚く御礼申し上げます。

鎌田圭子先生(英語)が10月7日、ガナナ共和国セントピーターズ高校を親善訪問し、両校の友好の絆を深めました。昨年9月、同校の友好親善チーム20名が来高、今年、土佐高校側のガーナ訪問を熱望され

ていましたことを受けて鎌田先生に本校を代表して訪問をお願いした次第です。先方への記念品として特製の大型鳴子(ガナナ国旗、両校の校章を配し、Welcoming Friend Shipの文字入り)を贈呈し喜んでいただけたとの事です。またセントピーターズ高校からも心こもった民芸品をお土産として頂戴いたしました。

浅井大使の肝煎で日本大使館では、ガナナ共和国の要人や現地で活躍されているJICAの方々、昨年来高されたレノア神父や生徒の卒業生など多くの方々との楽しいガーデンパーティーでの交流をさせていただき、浅井大使ご夫妻に格別のお世話様になりましたことを感謝申し上げます。

多少雨に祟られることもありました。今年も立派な大





運動会の櫓のパネル

運動会が開催されました。運動会と云えば櫓やホームゲームが想い出されると思いますが、準備万端取り良く、多くの保護者の皆様をお迎えして、日本一を標榜するに相応しい大運動会であったと自負しております。なおこの度、昭和51年度以降毎年運動会を飾った櫓の大型パネル(6基の櫓を一枚のパネルに展示)を作りました。お貸し出しも出来ずので同窓会などでご利用下さい。(お申し込みは、事務千頭まで)

11月中旬に同窓生による2つの講演会が予定されています。「エンターテインメントロボットAIBOの開発」と題してソニーエンターテインメ

ント社の景山浩氏(50回生)と、「21世紀の南海地震」と題して京都大学総長尾池和夫先生(34回生)にご講演をお願いしております。正に土佐校ならではの講師の先生方であり、生徒、教職員ともども今から大いに期待に胸ふくらませております。

最後になりましたが、校舎の改築についてご報告申し上げます。現在は設計を担当する日建設グループと校内建築委員会ならびに作業部会各グループとで基本設計に関する検討会を重ねております。校舎施設のグループ別として、学習センター(図書館、視聴覚教室など)、教員関係諸室(教員室、会議室、事務室など)教室群、体育施設、食堂他などの部屋数、広さ、配置等のほか各期別立て替え工事手順等も併せて検討中です。

本年度中には基本設計が固まり、そうすれば新校舎の概要が皆様に図としてお示し出来ると思っております。募金活動についても具体化できるものと考えております。基本設計に続いては実施設計、そして工事着工の運びとなります。ただ工事が始まりまると現

校庭が使えなくなり、それ迄に体育授業やクラブ活動用地の確保など、解決すべき課題から、着工は少し遅れて平成18年初め頃になりそうです。

追って具体的スケジュールが固まり次第ご報告をさせていただきます。

本部だより

寒さに向かう折柄同窓生の皆様のご健勝ご活躍と関東支部のますますのご発展を祈念申し上げ近況報告とさせていただきます。(11月立冬の日)



幹事長 安岡範悦(39回生) 関東支部の皆さん、日頃は土佐中・高等学校同窓会の新核支部として新しい発想、新しい企画でもって同窓会を支えて頂き厚くお礼を申し上げます。



昨年総会でお話致しましたとおり、本年度は従来のホテルでの開催から母校での開催に変更すると共にホームカミングデーと位置付け「蘇るあの日々、門をくぐれば懐かしい母校」をキャッチフレーズに準備を続けてまいりました。

私達も皆さんに刺激を受け「変える勇気」を旨にチャレンジして参りました。ここに本部の活動状況をご報告しご挨拶とさせていただきます。

総会当日、母校には五名余の同窓生が参集し何らかの企画に参加頂き、さらに50回生以降の若い卒業生が一五名以上、初参加、女性、家族連れの皆さんが多数参加されている事に感激しました。



ホームカミングデーの幹事さん達

開催にあたりましては、池上校長先生を始めとする学校関係の皆さん、卒業生である教職員、在校幹事の皆さん、同窓会役員、皆さん、とりわけ西山副幹事長を実行委員長とする実行委員会の皆さんには大変お世話になり感謝を申し上げます。詳細につきましては後述の会報誌「向陽」に掲載しましたので「読」下さい。

一、会報誌「向陽」の発行、会員名簿等のデータ・ペーシ化の実施

会報誌「向陽」は従来経費面も考慮し、総会案内時に送付致しておりましたが昨年度から、総会議事内容等を含めて総会終了後速やかに送付するとともに、ホームページにも掲載してきました。今回はホームページを中心に

作成、同窓会名簿作成の為の住所調査も兼ね住所の判明する同窓生全員に順次、発送を予定しております。尚10月24日に開催された入学希望者に対する学校説明会(今年は多く保護者、生徒で約九名)の参加者にも配布をし、喜んで頂きました。

住所変更・登録、総会開催の案内や出欠の返信にもホームページを活用するなどデータベースの活用を進めて来ましたが、一昨年度池上校長にはパソコンを、36回生からビデオカメラを寄贈頂きハード面も充実してまいりましたので更なる活用をしていきたいと考えます。

一、土佐中・高校新校舎建築



在校生のコンサートを聞く

計画に対する協力
15年9月3日学校 振興会、同窓会との意見交換の場がもたれました。その中で

- ・高知県下では県立学校でも改築が進み、学芸、土佐塾は土佐高より校舎は新しく耐震性に問題が無いようであり、土佐高のみに被害がでる事態は避けなければいけない。
- ・現校舎の耐震性問題の解決、現経済情勢下の借入れ金利、建築費を考えれば早い時期に建築し、寄付金などで返済する方が得策である。

・大切なことは土佐高の教育目標、教育方針を踏まえ、学校が目指す教育内容に相応しい教育設備とする事が大切である。その為には他校訪問や学内討議を深め、コンセプトを作成することが必要である。との方向性が出され、その後、理事会で討議され16年6



特別授業をされた松尾、土居、古谷3先生



食堂で。昔は白、黒、黄色だった

そのうちだんだんオレ流になり、なんだかわからないうちに胸上げのセリーグ優勝を果たし、秋を迎えました。しかし日本一にはもう一步のところで及ばず涙をのみました。残念!! また来年に期待したいと思います。

月16日に第1回校舎建築募金委員会が開催されました。その委員として同窓会より宮地貫一会長、岡内紀雄副会長、横田整一副会長、北岡顕史代表幹事、泉谷良彦関東支部長、川崎美栄子関西支部長、久保地理介東海支部長が選ばれております。今後具体的な募金要綱が決定され募金活動が推進されることとなりますが、同窓生が「一人少なくとも一口」の気概で協力頂けることを切望しております。

東海支部だより

幹事長 村山文世(41回生)

関東支部の皆様、こんにちは。東海地方は、初春のプロ野球オープン戦の時期から、中日スポーツだけは、落合電で華々しく紙面を飾り始め

東海支部最大の行事であり、まず支部総会が、今年度は、5月22日(土曜日)午後5時半より、名古屋駅東5分の所にあります、ホテル・キャッスルプラザで40名の参加者を得て、開催されました。関東支部からは、市川幹事長、母校からは池上校長先生、本部からは溝淵副会長にご出席いただき、また関東支部筒井HP編集人のご尽力により立ち上げた東海支部HPにまつわる興味深いデモンストレーションもあり、盛会のうちに終了いたしました。来年度も同じ時期に同じ会場で予定しております。

また暑い最中、8月13日の高知のサンライズホテルでの本部・支部連絡協議会、続いて8月14日に今年から始まった母校での同窓会総会、「二四ホームカミングデー」の各種行事では、関東支部から出席された、泉谷支部長初



左から山崎幹事、神宮事務局長、南顧問

め、市川幹事長、金澤事務局長、山中副幹事長、岩村顧問の皆様、一際若返った元気なお姿に接することができました。

今年の東海地区の話題は、4月8日より浜松の浜名湖畔で開催された花博です。沢山の見物人でにぎわい10月11日に大盛況のうちに終了しました。もうひとつの話題は、来年3月に開催される、愛・地球博(愛知万博)です。只今、急ピッチで会場作りが進められています。それに伴い、中部国際空港(セントレア)も2月17日開港の予定です。名古屋近辺も地下鉄の環状運転が始まり、新しい鉄道が開通して、これから大いに様変わりして、大勢の方で賑わい、活気ついて景気も上向き事と期待しております。

東海支部では、本年度に役員交代があり、長い間東海支部発展にご尽力された、竹原幹事長(36回生)、南事務局長(37回生)がそれぞれ顧問に就任されて、代わって、村山幹事長(41回生)、天造副幹事長(52回生)、神宮事務局長(44回生)が新たに選任され、今後の支部活動を補佐する事になりました。よろしくお願致します。

更には最近の大きな話題として、母校土佐高校の野球部は、今秋の県予選準決勝戦で6対7で宿敵明德義塾に惜しくも逆転負けをしましたが、3位決定戦で11対7で須崎工に勝ち、四国大会に久しぶりに出場することになりました。だんだんと甲子園が高多監督のもと、近づきつつあります。同窓生一同が、甲子園のセンターポールに上がる校旗を見ながら、「向陽の空」を歌える日が来ることを願って、応援をしましょう！

最後に関東支部の皆様のご健勝と、益々のご発展を祈念して支部だよりとさせて頂きます。



村山新幹事長

関西支部だより

中塚頼彦(31回生)

筆山の麓鏡川の畔・・・土佐中学校の開校記念碑文は、バラック校舎の校門入った脇に、楚々とした築山があり、そこにありました。長い年月が経ちました。二二年になると創立一周年を迎える母校、昭和25年入学組の我々は70歳まであと2年のところにいます。今は昔、今日は当時の取っておきの話をしましう。

でいうラッピンゲシユートもやらされました。練習もわり部屋に案内されました。いや、連れて行かれました。この部屋たるやものすくく、バラック倉庫の石灰置き場で、静かに歩かんと真つ白な煙が舞つところでは、「サッカー部に入りや」一言です。「いっしん」のすつどんを馳走になるに及んでは一宿一飯の恩義ここにでき、土佐中学サッカー部の誕生とともに我がサッカー人生のキックオフとなりました。

ゴール前に連れて行った人は成田十次郎(旧姓山中・愛称ジウジさん)先生で、当時追手前高校の学生でありながらサッカーの指導にいられていました。他校の同級生に指導を仰ぐという、出来そう

で出来ないことを平然とやり通す創部期の先輩諸氏に頭が下がります。黙って背中で教えてくれました。27・28回生の山本(英喜)、我孫子、松本、大野、島崎、池、中野、小笠原・・・すこい先輩達です。

又、日本のサッカーが今日の隆盛を見るにいたる起点はメキシコで銅メダルを取ったところからでしょう。このチー

ムを世界に通用するレベルにした指導者クラマー監督を、日本で紹介したのは誰であろう。当時ドイツに留学していた若きころのジウジさんです。筑波大学名誉教授から高知女子大学学長を経て、今は高知学園理事長となられ、余暇は大好きな土佐への思いをこめ「ハチキンと土佐学」を課題に研鑽されています。

日本の近代サッカーの原点はこころ当たりであって、土佐を出発点にしていると言っても過言ではありません。誇りと名誉・義務と責任、サッカーが教えてくれた我が人生先輩諸氏・仲間達ありがとうございます。ございました。

間もなく創立一 年の母校は、新校舎建設から出発します。その折り返して構築できればと願つことは、ケンプリッジ・オックスフォードとの連携です。交換留学生から始め、土佐高からイギリスへ行こうです。そんな思いのする昨今です。

広島支部だより

幹事 中山和敏(40回生)

今年は、猛暑・台風・地震



と、自然災害の多い年でした。皆様には被害はございませんでしたでしょうか。お見舞い申し上げます。当地広島では、台風18号により厳島神社の一部である国宝の「右楽房」が倒壊しました。神社への参拝は10月9日より再開されましたが、倒壊した建物の再建には相当の時間と費用がかかるそうです。

さて、恒例の広島支部総会を11月6日(土)の午後開催させて頂きましたので、ご報告申し上げます。当支部総会は、支部議事、記念講演懇親会の3部構成と成っています。来賓として、母校の浜田教頭先生、本部の西山副幹事長、関東支部の山中副幹事長と西岡筆山編集長、東海支部の村山幹事長、関西支部の原田事務局長、香川支部の



安岡幹事の皆様がご参加下さいました。広島支部名誉会員の竹村照雄様(20回生)も、わざわざ東京からお越し下さいました。

今年の記念講演は、37回生の幸徳正夫様(関東支部・税理士・産能短期大学講師)から、「笑門来福 言葉は力」と題してお話をして頂きました。どのように習得されたのか不思議にすら感じさせられる流暢でユーモアあふれる口調。感服と笑いを誘われる内容。「専門の税の話にも確実に笑いを織り込まれるほどの笑いに徹底した話法。1時間があつという間に過ぎてしまいました。

懇親会もアットホームな雰囲気の中で進行し、先輩・後輩の壁もはずして、全員の親睦を深めました。当支部総会

の特徴の一つとして、ご家族同伴の参加が認められていて、今回もお二人の夫人が参加され、一層、和やかな雰囲気となりました。

希望者による2次会はカラオケルームで行われましたが、歌う人は誰もなく、もっぱら懐かしいお話で深夜まで。一部の方は、3次会として「梅太郎」へ。また、翌7日には希望者で江田島へのオプショナル・ツアーも行われました。母校を代表してご参加下さいました浜田教頭先生から、「地震対策としての新校舎建設」への協力要請のお話を頂戴いたしました。支部総会では、事業計画として「新校舎建設に対する協力」も承認され、沖支部長から、「支部役員会でも度々協議し、名簿の整理や支部資金の強化も進めています。」とのご説明もさせて頂きました。

同窓生の親睦と、母校の発展を期する広島支部総会でした。

香川支部だより

事務局長 大石 浩(54回生)

関東支部のみなさん、こん

にちは、香川支部の大石と申します。今年7月より事務局を担当することとなりました。どうぞよろしくお願いたします。

さて、今年の香川支部総会は、例年どおり七夕総会と称して7月第一土曜日の7月3日に開催しました。当日は、母校から浜田教頭先生をはじめ、同窓会本部、各支部役員の皆さんにご出席をいただきました。関東支部からは市川幹事長、浅井顧問にご出席いただきました。ご多忙の中、また遠路を本当にありがとうございました。

今年度の支部総会は、9回生の大先輩から71回生まで50名をこえる仲間が集まり、例年にも増して大変盛り上がりました。特に若手メンバーが大勢集まり、大いに盛り上げてくれたのは嬉しい限りです。会場の方は今回から、JR高松駅・高松港周辺の再開発地区「サンポート高松」にあるシンボルタワーに変わりました。昔話になりますが、かつて高知への帰省の際には、宇高連絡線のデッキで讃岐うどんをすすりながら高松港を目指し、接岸するやいなや土讃線の急行列車に向かって陸橋

・ホームを疾走したものです。現在では瀬戸大橋の開通により、岡山から高知へ特急が直結し、高松に来られることはほとんどなくなつたと思えます。いまや高松駅周辺は、宇高連絡線の棧橋も姿を消し、モダンな新高松駅とシンボルタワーや全日空ホテルなどが立ち並ぶウォーターフロントの洒落たエリアに生まれ変わっています。

総会当日は晴天に恵まれ、開宴後しばらくするとシンボルタワーの17階の会場からは夕暮れ時の瀬戸の島々を臨むことができましたが、その頃になりますと大半のメンバーは窓外の景色はそっちのけでお猪口片手に昔話に没頭しておりました。事務局の予想どおり(?)の展開となつた次第です。

話は変わりますが、今年台風の当たり年でした。6月くらいから早い台風が襲来しはじめ、7月以降は「また今週も・・・」と言っくらい数多くの台風が四国周辺を通過し、大きな被害を残しました。高知を離れて気候穏やかな香川で生活していると、地元香川の人達が台風接近で大騒ぎするのを見て、「高知の

雨風はこんなもんやない」と妙に誇らしげな気分になつてしまつのですが、今年が高松もやられました。8月末の16号では、高松市の海沿いから中心部の市街地まで、高潮のために思いもしなかつた大きな被害を受けました。改めて油断を戒めつつ、来年は災害の少ない穏やかな年になつてほしいと思います。

最後になりましたが、関東支部のみなさんのますますのご発展・ご健勝をお祈りいたします。お時間がありません。お時間も一段落ついた本場の讃岐うどんを食べに、是非高松にお越し下さい。今後ともよろしくお願いたします。



第8回土佐高ハイクの会

北横岳の旅

濱田 継夫 (37回生)

筆山の読者であれば、ハイキングを楽しむ会があることはご存知かと思う。主に37回、38回生の中高年が集まって群をなし、一部に若手と比較的高齢の方々を巻き込んで実施される。夫婦で参加する人たちも多い。近年の中高年登山ブームの一端を担っているともいえる。最初の登山が富士山。そこで散々苦労した。その話は市原君のレポートに詳しく出ていたので省略するが、一度くらいは日本一の山に登ってみたい行かんぞ！という無謀で、悲惨な試みももたらした結果に懲りることもなく、その際に購入した登山靴や登山道具をそのままにしておいては勿体ないと言う動機から、爾後延々と続き、今回は8回目にいたっている。

8回にもなるので、ベテラン(?)参加者の靴には擦り傷も増え、貫禄がある。しかし、年に一回の行事なので、その間参加者の年齢の方も8年をプラスしており、老化も進んでいる。腹が出て、皮下脂肪が厚くなり、すぐに顎がありがちである。従って次第に難度の緩やかな山を選ぶ

ようになつてきた。もともと登山というのは口実、と言われても仕方がないようなところもあり、汗をかいて旨いビールを飲みたい、という方が本音でもある。参加者の欲求がスポーツ登山を離れて拡大し、温泉があつた方がええ、往きにも帰りに酒が飲める方がええ、行った夜に宴会が開ける方がええ、などのわがままが生かされた登山型バス旅行である。勿論純粋な気持ちで参加してくださる方もいることはいるが主流ではない。昼の登山も良いが、夜の部が楽しみと言う方々も多い。

今回は、甲州・信濃に跨る山塊で、名山の誉れ高い、八が岳連峰の北に位置する「北横岳」が選ばれた。二四八メートルの高峰である。しかし、正味の登りは1時間半ほどの行程で、冬場はスキー場となるピラタスという名のロープウェイで一気に四五〇メートルを駆け上がり、標高二三三七メートル



山頂駅での全員集合写真

ルの山頂駅に着き、そこから二四〇メートルの標高差を詰めれば、北横岳頂上に立つことになる。三宅君流に言えば「しいよい」山なのだ。しかし

その標高だけの様相は備えており、亜高山帯から、高山帯に切り替わる境界特有の珍しい縞枯れ現象が広がり、溶岩が散乱した上に高山植物

が根を生やした「坪庭」と呼ばれる空間が広大な範囲に広がっている。縞枯れ、と言っているのはコマツガなどが木としての寿命を終えて立ち枯れし、徐々に若木に切り替わっている山の木々の縞模様のことをいう。諸行無常の人生を思わせる。縞枯れと奇岩の中を縞枯れに近くなつた中年の集団が子供のようにはしゃぎながら歩く。ハイクとはいうものの、川柳の世界でもある。

「縞枯れて山は緑の若日髪」「秋の空山も人もみな縞枯れて」なんて詠みたくなつたりする。多くの方々はご存知だが、このメンバーの中に雄弁と饒舌で有名な38回生の窪田君や中島君があり、全体の雰囲気

をリードし、かつ仕切っている。それを多舌と毒舌で有名な三宅君が独裁者のような言動で盛り上げ、そして時として、皆を本音むき出しの世界に導く。だから、8回も続いているのである。決して上品とはいえないが、漫才のような親しみと笑いがある。面白いのである。その中の主役の一人窪田君が今回は札幌に栄転されたので、多少饒舌にか

げりが見えるかと、心配されたが、その必要はなかつた。いつも以上のハイクの会となつた。まず第一に、過去3回の旅行が、いずれも雨にたたられ、登るべきところ、見るべきところに少数の人たちしか行けなかつたが、今回は雨の降る前に、ほぼ全員が頂上に辿り着けたこと、第二に窪田君の欠落をカバーする中島君や幹事の幸徳君のいつも以上の奮闘があり、笑いが絶えなかつたこと、第三に幹事への選抜が奏効して過去最高品質の食事が出たこと、などである。直接土佐高には関係していない参加者のコメントもそれを裏付けている。

残念ながら、2日目は雨となり、予定していた車山高原・美ヶ原の散策は実現しなかつた。が、上諏訪の高島城で小規模ながら「御柱」の祭礼を見る事が出来た。子供たちが御柱に乗っかり、町内の人々がその柱を曳きながら、街を練り歩き、所々で掛け合いをするものであった。

参加者の最高齢は74才の森さん(23回生)である。スマートな体躯と穏やかな顔を持つている森さんがこの会に参加



頂上で記念写真

「あ、俺たちが四の五の言っ
てられない」、と反省し、
かつ勇気付けられる。日ごろ
節制し、散歩を欠かさないそ
うである。

「森さんは夕餉の乾杯の際のこ
メントで、来年もぜひ参加し
たいと思います」、と言われ
た。それを聞いていた後輩は、
「あ、俺たちが四の五の言っ
てられない」、と反省し、
かつ勇気付けられる。日ごろ
節制し、散歩を欠かさないそ
うである。

「ナに飛び、浅井さんたちとあつ
て取材をする」ということであつ
た。本当はそのこともあつて
今回は辞退するつもりであつ
たが、ガナに同行する中村
裕子夫妻に、「私らアは、勿
論ハイクの会には行くぞネ」
といわれて、当然のごとく参
加することになった、という。
土佐の「ハチキン」の世界は
まさに「体育会系」のそれだ
である。

「八チキンにも色々あるが、
私たちと同学年の中村裕子さ
んは、その典型であろう。何
事にも積極的ですが、飛び込
む。ごく最近では、介護士の
資格取得に挑戦し、宣言どお
り、取得した。料理にも蘊蓄
が深く、オリジナル料理を開
拓している。面倒見がいいこ
とはみなの認めるところだ。
しかし、男勝りだから、時と
していつかは辛らつで、ばつ
さりやられた人も数知れず、
怖いおばさんでもある。今回
も、幹事がブンがたちません
ので、私が説明します」といっ
てバスに乗ったばかりの我々
に旅程を説明した。実業界で
《大先生》と言われる講演の数
は数え切れないといわれている
税理士の幸徳君も顎で使わ
れる。中島君が司会のコメン

トの中で故弘瀬との話を引き
合ひに出して、「裕子も昔は
可愛らしかったぞ!」と言っ
ていたと言つたら、年月が彼
女を真のハチキンに鍛え上げ
たのかも知れない。

「幹事は37回と38回生が交替
でやることになっており、今
回は37回の幸徳君が幹事をや
ることになった。私はナン
チャーやりませんで、裏幹事
の橋田・中島・中村さんに全
面的におまかせに抱つてした。」
と言つ挨拶をバスに乗り込ん
だときに最初にした。しかし
ながら、それは社交辞令で、
二日目に帰途に着いたときは、
「幸徳先輩でなくてはこのよ
うな成功はなかった。次回も
是非やつてもらいたい」と皆
が感謝の拍手が止まないくら
いだつたから、その奮闘ぶり
は全員が認めるところである。
しかし、裕子のハツバが効い
ていたことも一因であろう。



頂上にて

面白かつたのは、奥方に参
加を拒否された、参加者のコ
メントである。一緒に行こう
か?と誘ったときに、「私は
別口があるからそちらに参加
します」ときっぱりと断わら
れた、それも細君の行く先が
目と鼻の違いの上高地だった
というケース、あるいは、
「酒飲みとの付き合いがある
きにあれが厭」と即座に断ら
れたケース、「前回参加され
たある年配のご夫婦はお互い
が思いやりがあつて、まっこ
と、羨ましかつた、あんな風
になりたいモンじゃ」と婉曲
に誘つたら、「フン! それ
は相手次第じゃ!」と反撃を
食つたというケース、まこと
にホゾを噛むような、切実な
話がバスの中で吐露され、聞
く人々の苦笑、哄笑を誘つた。
これらもハチキンの細君を
持っている土佐の男どもの共
通の悩みでもある。年を重ね
るに従い、アンコントローラ
ブルとなり、若いときの不祥
事や度重なる飲酒・遊興の咎
が重くのしかかつて妻に頭が
上がらなくなる。しかし、ハ
イクの会に出してもらえら
言つことは、傾きかけた天秤
の片方の皿にはまだ多少の何
かが残つているということだ

あるう。
切実さと面白さ、これがこ
のバス旅行のエッセンスであ
る。気楽に参加してもらえば、
年齢の壁を超えた楽しい世界
が見えてくる。
「長年の飲酒が頭に来てお
り、ナニを言つかわかりませ
ん、この人の言動をいちいち
気にしてもらふ必要は全くあ
りません」と某君が言つてい
たように歯止めが利かなくな
つた毒舌もあるが、会社生活か
ら離れ、あるいはストレスの
ない環境に入り込むと後輩も
先輩もない、皆がティーンエ
ジャーの昔に回帰して、言
いたいことを言い、笑つて楽し
い一日を送る、そんな集まり
は土佐高の集まりだから出来
るのかも知れない。それにあ
る程度の年齢以上になれば、
顔つきも似通つてくるから、
外見上の差異もない。同じよ
うな集まりが他の学校である
と言つ話は聞くことは少ない
のだから、価値のあるハイキ
ングの会と言える。次回の幹
事長は38回の三宅君、副幹事
は中島君となつた、その名前
を聞くだけでもう笑いと期待
がこみ上げてくる。おそらく
次回はバスガイドは不要であ
らう。

ー第3回 ガーナでよさこいの旅ー

秋田清夫 (27回生)

10月6日から13日までの8日間、ガーナ共和国へ旅した35回生の浅井和子女史がガーナ日本国大使となつて、「土佐のよさこい踊り」、「ガーナよさこい祭り」を定着させて3年目となり、それを見るのと、その他の観光を兼ねて、妻を誘って行くことにした。

「第3回ガーナでよさこい二四」というツアーに加わり総勢30名、団長に祭り上げられての旅だった。

関西空港で、東京方面組と高知方面組とが合流して結団式を挙げ、エミレーツ航空でアラブ首長国連邦のドバイで乗り継ぎ、ナイジェリアのラゴス経由で、翌7日ガーナの首都アクラに到着した。大使夫妻（ご主人は30回生の浅井伴泰氏）の出迎えを受け、その後、直ちに市内観光に出か



浅井和子大使（左端）と筆者夫妻

けた。国立ガーナ大学内の野口英世旧研究室等を見学・観光。ガーナのことといえば、世界的な細菌医学者野口英世博士のこと、一九五七年三月イギリスのいわゆるアフリカ植民地のうち、最初に独立した国ということくらいしか知識がなかったため、旧研究室を見たときは感慨深いものがあった。

翌8日の夜は、現地のよさこい関係者との「よさこいイブ」が、大使の個人的な招宴とのことで、広大な大使公邸で開かれた。終わりの方で、ガーナの観光大臣も見えられ挨拶を交わした。何かしゃべられるのではないかと、英文挨拶文等を準備して行ったが、日本人が多く、ガーナ人でも日本に留学するなどして日本語が理解できる人達であったので、結局英語で挨拶する機会がなく、むしろほっとした。

翌9日早朝は、当日行われる「よさこい踊り」の特訓で午後からガーナの「よさこい祭り」に参加した。私の「よさこい踊り」の初めての踊りは、高知ではなく、ガーナであった。このガーナの「よさ



こい祭り」、大変な熱気、盛り上がりようで、観光大臣も出席するガーナの国の一大イベントとなつていいると思われた。さすがは民間から抜擢された浅井大使、自由な発想の下、日本国のため、ガーナ国のため、両国の親善のために良かれと思われる土佐の「よさこい踊り」のガーナ国普及・定着を着想され、これを見事に成功させた。その卓見と実行力には敬服した。

その外、その夜の現地在住日本人の方々と「よさこい祭り」打ち上げ会での現地企業幹部女性の「これまでの大使は、私達がこういうことをしたいと、考えを練って相談に行つても、それは駄目」



とか『それは難しい』などと言つて、相手にしてくれないことが多かったが、浅井大使は『いいわよ。やりなさい』と言つて前向きに考えてくれ、有難い。』などという言、その後の観光中での現地日本人ガイドの「日本がガーナ国の最大の援助国だが、そのことを、これまでの日本国大使はガーナ国民に分からせる努力をしなかった。浅井大使は、日本の援助で完成した施設の式典には必ず出席し、挨拶してPRし、それがテレビやラジオで放映・放送されるので、ガーナ国民は日本の貢献を知る」などという言。浅井大使には脱帽である。

翌10日は世界遺産のエルミナ城を見学した。アクラからエルミナ城へ向う道中は悪い

士佐中高同窓会 北海道支部 設立準備会開催さる

島村昭範 (49回生)

11月13日(土)夜に、同窓会「北海道支部」設立準備会が札幌の某ホテルで開催されました。旭川在住の服部弘(49回生)さんとともに出席してきました。

北海道在住者の名簿では40名ほどでしたが、出席者は25回生(73歳)から78回生(北大2年生)まで、11名でした。以下の陣容で北海道支部が発足することになりました。

- 支部長 田原哲士(37回生) 北大教授
- 幹事長 窪田秀忠(38回生) 準備発起人
- 事務局 大崎博士(70回生)

YOSAKOIソーラン祭組織委員会 広報 有岡佐和(78回生) 北大2年生 幹事 その他7名の出席者

来春には、池上校長先生や同窓会本部幹部、関東支部幹部などをお招きして、盛大に設立会を催す予定です。北海道に行くことを楽しみにしている方がたくさんいらっしゃるようです。どうやら、北海道支部会員出席者よりも来賓の方が多くなるかもしれません。

日野塾出身の方へ・・・ 中学受験の進学塾として日野塾がありました。久しぶりに日野塾の話が聞きました。もう何年も前に日野先生が亡くなったことを聞いていたので、日野塾がどうなったのかと思つていたので、まだ日野塾は続いているようです。たまたま今回集まつた中では、現役の大学生をはじめ若手の3、4名ほどは皆さん日野塾出身でした。私も日野塾出身だったので、日野塾の話でも盛り上がりつてしまいました。

ふるさとへの手紙(四)

慶應義塾大学三年

合田 瑛典(77回生)



先日、東京六大学野球秋季

リーグ戦において、慶應義塾大学は優勝という目標を達成することができた。優勝の瞬間をマウンドで迎えることができ、言葉では言い表せない喜びを感じることができた。そのようないいタイミングなので、この機会に自分の大学生活を簡単に紹介してみたいと思う。

大学生活といっても、正直なところ大学にはほとんど通っていない。一日の大半をグラウンドで過ごしている。ただ誤解されたくない。ただ付け加えておくと、テスト期間中は睡眠時間を削って勉強しているし、単位もまずまず順調にしている。一緒に寮生活している周りの部員にも、自分と同じように指定校推薦で入ってきた人も、一般受験で浪人して入った人もいて、野球以



2004年秋の六大学リーグ優勝の瞬間

外の面でも本当に学ぶべき点がたくさんある。そういったことを考えると、一人暮らしをして大学で勉強し、バイトをするといった一般の大学生とはまた別の、貴重な経験をさせてもらっているなど感じている。

肝心の野球の面では、土佐中・土佐高と共に準優勝止まりで、自分の中で一番になれないのではないかと、思うこともあった。しかし、今年の2月に行われた高知の春野球場でのキャンプがきっかけとなり、昔の悔しさなどを思い出すことができた。また、土佐のOBの方々などをはじめ、多くの人が応援してくれてい

るのだと感じることができた。そのようなことがあり、いい練習をおくれたことが、優勝という最高の結果につながったのではないかと考えている。こうして来てから改めて土佐の凄さを実感している。出身校を聞かれた時に、「土佐です。」と答えると、まず知らない人はいない。たいてい、昔はああだったとか、あの選手は良かったね、といった風な話に話が広がっていく。そのような伝統のある学校の出身であるということを見出し、誇りに思っていてこれからは過ごしていきたいと思う。

最後になったが、今の自分の野球はもちろん、野球以外の面でも基礎を作ってくれた土佐には感謝している。他にも、これまで野球を続けさせてくれた両親や、サポートしてくれている周りの方にも感謝の気持ちでいっぱいである。それを形で表すためにも、来年のシーズンも優勝しなければならぬと思う。母校が甲子園に出て土佐の名をさらに有名にしてくれれば一番だが、自分としても神宮球場に土佐の名が一回でも多くアナウンスされるようにすることが、母校への恩返しになるのではないかと考えている。

道が続いたが、突然すばらしい舗装道路が現れた。我が大成建設が「事中の道路だった。アクラの漁港の拡張工事も日本企業によるものとのこと、日本人として誇りに思った。エルミナ城では、男性ガイナーナのガイドの案内があったが、かなりの教養人と見受けられた。奴隷として売られる黒人男女が船出前に、この城に別々に一時収容されたと言ふことで、その場所等につき説明されたが、ここを訪れる黒人のアメリカ人は一様に先祖の苦難に思いを馳せて涙を流すとのことで、まさにうべなるかなである。

「奴隷の対象にされるのはどういう黒人か。」と質問してみた。「鋭い質問ですね。」という女性の声私にすぐ右後方でした。ふと見ると、大使であった。ガイドの説明は「戦争に負けたもの」ということだった。私は、当時白人と黒人が戦争をすれば黒人は負けるに決まっているから、黒人全体が奴隷の対象になるのかと疑問に思ったが、そのことは問はずびれた。この点アクラへの帰りの車中、大使が明快に答えてくれた。黒人の部族間に抗争があり、絶え



ず戦いがあり、勝った黒人部族が負けた黒人部族の男女を白人に売り渡し、それを白人が奴隷として連行するとのことだった。それでも、私は白人がけしかけて戦争を起させることもあったのではなからうかとの疑問を払拭できなかった。そのうち、少し暇がきそうかと思っている。

翌11日の午後ガイナーを発ち帰国の途についた。翌12日早朝ドバイに到着し、午前中ホテルで休息の後、午後ドバイ市内等を観光した。夜はダウ船(観光船)で観光しながらの夕食。同夜の深夜、機上の人となり一路日本へ。13日午後5時関空に到着。全真無事。まことに楽しい旅であった。私にとっては、アフリカガイナー旅行は、これが最初にして最後となる。

(慶應義塾大学体育会野球部)

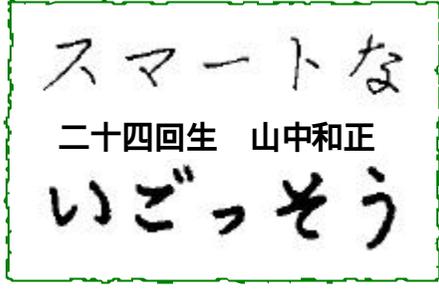


土佐中高同窓会・関東支部の重要な行事に年一回開催の総会がある。今年(二四年)は5月30日に代々木の青少年センターで開かれ、三千人強に案内状を発送し、約二千人の同窓会員が集まった。

この総会の設営、案内、催行は、毎年交代で総会幹事会が結成され、この幹事会の睿智と努力で遂行される。七、八年前から幹事会は10年おきの同窓生の有志で構成されることになった。素晴らしいアイデアである。近年、同窓会はどこでも集まりが余りよくない。同期会とか、クラス会とか同世代の集まりは盛会でも、若者から年寄りまでとなるとうも敬遠される傾向にある。だが、我が土佐中高同窓会・関東支部総会は例外の部類に属する。前述の総会幹事会の効用が大きいと私は評価している。

関東支部の内規によると、

二 四年の総会幹事会は「4の会」を中心に構成されることになる。「4の会」とは4、14、24、34、44、54、64、74回生の有志である。4、14回生はお歳なので、あまり出てこられない。私達24回生を最長老として組織を作ることになる。「私も寄る年波で・・・」と辞退を支



関東支部総会幹事会「4の会」

部長に申し出たら、「冗談だろう」と一蹴されてしまった。ほんとに冗談だった。

総会の成功、不成功は集まった人数の多寡が、大きな評価要因となる。昨年の「3の会」は、熱心に企画・運営をし、三 人近い会員を動員した。われわれ「4の会」も、目標を「参加者数三 人以上」



総会会場での筆者

に置いた。大勢集めるのには若い人の好む趣向を取り入れることが肝要である。そのためには、64回、74回の若い仲間を多数幹事会に加えて、いい意見を出して貰うことが必要である。64回、74回への呼びかけを繰り返した。大勢集まる会には、結構人手を要する力仕事の部分がある。このあたりは、年寄組の34回、44回生が処理してくれた(年寄りとは失礼しました。いやまだまだ若い。お疲れ様でした)。エー駆使だと



好評だった箸拳大会

か、パンフレットのデザインだとか、司会だとか、才能のある人は意外にいるものだ。南海地震の予測の話をしてくれた尾池京太郎総長も「4の会」だ。さすがは、天下の土佐高校である。最年長のわれわれ24回生は総会幹事長、総会副幹事長(そんな肩書きの役職はない)の座にあぐらをかいて、大舟に乗ったつもりで高見の見物をしていた。

結果において、昨年には若干及ばなかったが、二八一人を動員し、雰囲気も評判が良かったように、「まあ成功」と自己評価している。面白い裏話も多々あるが、紙面も尽きたし、差し障りのありそうな部分もあるので、時効を待つことにしよう。

いごっそうの一言

参加者不足で悩んでいた高知の本部同窓会総会は大変身を遂げ、成功した。今年、従来ホテルで豪華にやっていたのを取りやめ、母校の教室と食堂を開放して、ホーム・カミング・デーの行事の一つとした。引退した恩師の特別講義も大盛況であった。関東支部総会の改革の道しるべにもなるのではないだろうか。

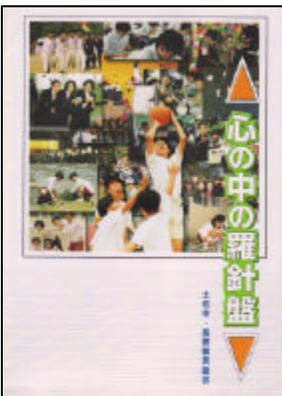
書評

「心の中の羅針盤」

67回生 谷口瑞枝

本書は土佐中等高等学校教職員組合が講師に招いた教育関係者による講演要旨集と先生方の教育実践録である。講演では「思春期」と「本当の学力」について語られているのだが、10代の子供を持つ親、預かる教師は大変なですね。子供は心身の成長が著しく何を考えているか分からない。でも勉強をしつかりしてもらう環境を作ってあげなければいけない。私たちは親、両親を思い悩ませながら、そして守られながら成長してきたことを思い出させてくれる。実践録は「教科書を使わない授業」の事例にルースソックス論争とテーマは幅広い。「普通の授業」しか受けたことがなかった私にはつらやましい。

進学校の授業風景とは少し異なったユニークな取組みは土佐中・高の伝統に新しい風を吹き込んでいる。



23回生同期会開催

岡崎昌生 (23回生)



にみんな満足したようであった。食事コースの間に、各夫妻から、それぞれの近況、土佐中時代の思い出などを話してもらった。

戦後 9月からは各地での分散授業となり、私たちは大津の小学校に土電で通った。翌21年夏、木造ハラックながら新校舎が出来上り、久しぶりに通常の授業を受けた。

みらいのビルの谷間に沈みゆく秋の夕日を眺めながら、約20分の舟旅を楽しんだ。午後5時前、JR横浜駅で「ヴィンターゼン」を約し解散した。

私ども土佐中23回生は、現在、東京近辺に12名任んでおり、毎年2回(6月、12月)男ばかりで酒を飲みながら、旧交を温め、近況を語りあうのが、この20年通例であった。

しかし、みんな古希を過ぎること5年、白髪、光頭的身となったが、まだ足腰も元氣酒も飲める。これひとえに数十年にわたるヨメさんのおかげでもあり、感謝の気持ちを含めて、また、ヨメさんを含めたお互いの親睦のため、「夫婦同伴のクラス会」をはじめて開くこととした。

爽快の11月8日、上田康夫君(ご夫妻の肝いりで、横浜元町の「霧笛楼」(大佛次郎さんゆかりの店)に集ったのは21名(10夫妻プラス1名)、ほぼ百パーセントの参加であった。

正午開始、フランス料理、酒類はワインが主で、この点いつもとはやや趣を異にしたが、老練なシェフの上品な味

ここで、23回のあらましについて綴らせていただきたい。入学したのは昭和17年(一九四二)、あの太平洋戦争の始まった翌年春、数えてみれば62年前となる。

昭和22年3月、戦中戦後の

1年生は、70名、これが35名ずつ1組、2組と分れた。1、2年の間は、春、秋に「勤労奉仕」といって近隣の農家に麦刈り草刈りの手伝いにいく程度で、ほとんどが学校に通い勉強した。

昭和19年、戦局漸く急を告げ、その名も「勤労動員」と変り、3年2学期からは日章村の海軍飛行場(現在の高知龍馬空港)の滑走路づくりのモッコかつきとなり、翌年4年生となったが、市内知寄町のミロク製作所で鉄砲づくり

昭和20年7月4日のB 29の空襲により、高知旧市内の半分、そして母校校舎も全焼。そして8月15日の終戦の日を迎えた。

当日、午後2時半会食を終え、山手の外人墓地、港の見える丘公園、中華街を散策、山下公園の棧橋から、シーバス(巡航船)に乗り、海から横浜ランドマークタワーやみなと



小料理 赤坂「土佐」

港区赤坂3-13-12
新日本パレスV 赤坂 4階
電話 3686-9464

季節のふるさとの味 土佐酒蔵

銀座7-12-4 友野本社ビルB1
電3545-3855 銀座第一ホテル通り

大恩ある友

秋田清夫（27回生）



今春の叙勲で、瑞宝重光章受章の栄に浴した。数多の方々のお陰によるものであるが、その中でも絶対に忘れることのできない友がいる。岡本福三郎君である。

土佐中2年になったとき奥立中村から、色はやや浅黒いが端正な顔をした男が転校してきた。独りぼつんと淋しげにしていたので声をかけて以来、急速に親しくなっていた。それが岡本君である。当時高知・幡多間は交通不便で船で行き来することが多く、船で高知港へ着いたと言っていた。

彼の長兄は先の大戦でビルマのインパールに於いて戦死し、次兄は旧制土佐中5年であつた（旧制と新制が併存していた）。二人の姉さんは結婚していて、写真を見せてもらったが凄く美人であつた。彼の下宿には、兄姉から引き継いだ岩波等の文庫本が沢山置いてあり、私はここで初め

て文庫本の洗礼を受けた。最初に読んだ本はアンドレ・ジイドの「狭き門」、次が久米正雄の「学生時代」であつた。いずれも強烈な印象を受けた。漱石、鴎外、千手菩薩、フロアベル等等、片っ端から読みあさつた。

大学1年の夏、誘われて下ノ加江の彼の実家に遊びに行つた。同じ28回生のF君も一緒だつた。台風一過、空は澄み渡つていたが、町の西部を流れる下ノ加江川は豪雨であふれ、濁流が海に流れ込んでいた。私達はその川幅25メートル位の河口を泳いで向こう側の突堤の先を回つて、その前方の砂浜へ行くこととした。不安はあつたが、岡本君は水練の達人で土佐中の水泳選手であり、また3人だけという気の

緩みもあつて、岡本君らの後に続いて濁流に飛び込んだ。運悪く満潮時であつたので沖へ流されて行つた。浜辺は遠くなるばかりであり、ひどく疲れてしまつた。突如「波に乗れ！波に乗れ！」という岡本君の声が聞こえた。波に逆らうなどということだと我に返り、波の流れに身を任せただけ、既に遅く、この世の見納

めだと思つた。何と親不孝者か。「俺はもう駄目だ。」と叫び、沈みかけた。「頑張れ！」という岡本君の声を聞いたが私は沈んでいった。しかし、突然私の身体が波上に浮び上がった。岡本君が潜つて海中から私を体ごと支え、突き上げてくれたのであつた。

今日私があるのは、岡本君の大恩によるものである。なお、F君は自力で泳ぎ切つた。

秋の叙勲

旭日中綬章

西岡瑠璃子（28回生）

社会党参議院議員 参議院

災害対策特別委員長他を歴任

藍綬褒章

岡内紀雄（34回生）

高知銀行頭取 金融業務功

紫綬褒章

黒鉄ヒロシ（41回生）

漫画家（本名 竹村弘）

お悔やみ申し上げます。

8回 安藝勉 04・9・26

29回 増田美州子

ウルルン滞在記

吉田真一郎（66回生）

土佐高同窓会関東支部の皆様こんにちは。私は現在大阪の歯科医院に勤務しています。昨年10月TBS系の「世界ウルルン滞在記」初めての一般視聴者募集に応募したところ、運良く、八一人の中から2人に選ばれ、アマゾンの裸族の村に滞在したんです。一覽頂いた方もいらっしゃると思いますでしょうか。

（1）自己紹介
実家は野市町です。中学時代は小村先生のもと、野球部に在籍し、高校時代は森本先生、久米先生、千頭さんのもと硬式テニス部に在籍しておりました。今も文武両道、全力疾走を胸に一生懸命働いて遊んでいます。岡山大学時代は硬式テニスとトライアスロンと宴会（これぞ土佐の男！）を頑張りました。現在東大阪市のヨリタ歯科クリニックに勤務しております。

（2）なぜ八一人もの中から選ばれたのか？
オーディションで伝えたことは土佐の男の熱い魂、情熱

です。そして、大きな夢です。これが胸に響いたので（多分）。そして、世界中で働くことが僕の夢だと伝えました。面接官の徳光さん、相田翔子さんが求めている人間とマッチしたのはラッキーでした。そしてヨリタ歯科のみんなの後押しが強烈でした。寄せ書き色紙や白衣を用意してくれました。

（3）その前に、なんで応募したか？
ウルルンで定期的に紹介しているドイツ国際平和村という戦争で傷ついた子供たちを癒している施設で働きたいと思つたからです。関西オーディションではドイツに行きたいと力説しましたが、「あそこは東ちづるさんが行くことに決まっているから・・・」と言われ却下されました。



（写真）ヨリタ歯科クリニックのスタッフと撮影された写真。

次の東京最終オーデイションでは徳光さんが裸族に行く人間を探している空気を敏感に感じたので、「僕は前から裸族に興味があるんです」という事に突如変更。裸になる覚悟もあり、裸族ともコミュニケーションションを取って見せますと言い切りました。

「4」現地では実際どうやってたん？全国ネットで全裸？言葉は？何食べたん？

現地まで5日かかりました。閑空ノ成田ノニューヨークノサンパウロノベレンノマナウスノサンタレンノ現地(ソエ族の村)だんだん飛行機は小さくボロくなりました。最後のセスナの揺れは相当でした。セスナの窓の所を怖さのあまり、掴んでいたら、バキッと取れてしまいました。

行くまではどんな形で局部を隠しているかがとても気になっていました。ペニスケーヌ付けたいなあ、腰ミノかななどと考えながら、現地へ。するとそこにはまったく隠していない本物の裸族が。やはり！しらぶで全国ネットで全裸はいくら何でもまずい。マジで帰りたいと思いました。するとソエ族の管理人(ブラジル人)に、村の中では女性



に襲われるから全裸にはなるなど言われました。残念なような、ほっとしたような感じでした。という事で、現地ではパンツ着用でした。後で脱ぎっぱりが悪いと各方面からお叱りを受けましたが、規則だからしょうがなかったのです。

最初は全裸の女性だらけで目のやり場に困りました。彼らはくちびるにブツクルという長さ10センチほどの木を付けているのが特徴ですが、それにも気づかない位、下半身ばかり見てしまいました。ソエ族はあまりにも奥地に住んでいたため争う事を知らないとても友好的な民族でした。彼らはお尻の青いモンゴロイドで、ブツクルさえ無ければ日本人と変わりません。私もすぐに慣れて楽しく暮らしま

した。彼らは見つかってまだ20年しかたつておらず、言葉は管理人でさえ、一割位しか分からないとのことでした。だから通訳はいないようなものでした。でも挨拶から始まり、ありがとう、ごめんなどい、おいしいなどを、彼らとの会話の中で覚えたら、結構しゃべれました。笑顔も必須ですね。

食べ物ほり、豚、亀、ヒョウ！そして最高のご馳走はサル！でした。僕も知らずに食べたのが、サルでした。味は・・・、毛がそのまま付いているので、すごい食感でした。そして、そこに歯科診療所を作ってきました。不似合いな最新式のチェアを設置し、歯磨きの仕方を紹介してきました。今、診療所がどうなっているか気になります。再会ウルルンの依頼を待っています。

「5」番組後のみんなの反応は？
駅まで行列が出来るほどは患者さんが来ていることはありませんが、コンビニで知らないおばちゃんに「見たわよ！カワイイお尻ね。」と言われ、背中を叩かれたりはしました。そして今まで来てくれたいた患者さんは大喜びです。

そしてスタッフが新たな夢を描き、資格を取りに学校に入学したり、結婚したりとみんな挑戦を始めました。
「6」これからの活動は
裸族ともコミュニケーションを取れた自信を胸に、来年5月に大阪府の箕面市という郊外の町に歯科を開業する予定で、今は大忙しです。新たな目標に向けて、爆進中です。

最後に、現地では悩みめいた末、歯磨きの仕方を彼らにスビチして、実演して伝えてきたのですが、どこまで伝わったかという感じでした。帰ってきてから、名案が浮かびました。彼らはサルの肉、それも血が滴るような肉が大好きです。サルの肉の味がする歯磨き粉を使えば、喜んで歯磨きをしてくれると思います。もし再会企画があれば、持っていこうと思っています。

暖かい地域で、食べ物豊富な地に住み、争いがなかったソエ族はとても心優しく、おらかな人々でした。まさに高知の県民性に似てるような気がしました。ソエ族のようにお金がなくてもこんなに心豊かに暮らしている人々に会ったの

は初めてで感動しました。放送では残念ながらカットされましたが、おみやげによきこいの鳴子とハツピを渡してきました。思った以上に喜ばれました。

今回、夢を持ち続け、前に進み続けることの大切さを実感しました。土佐高OBの皆さんの更なる活躍を期待しています。僕もがんばります。ご指導よろしくお願いします。
追伸
裏話は山ほどあります。興味のある方はホームページ(www.yoritan.jp)を御覧下さい。電子メールアドレスは yoshida@yoritan.jp。

暖かい地域で、食べ物豊富な地に住み、争いがなかったソエ族はとても心優しく、おらかな人々でした。まさに高知の県民性に似てるような気がしました。ソエ族のようにお金がなくてもこんなに心豊かに暮らしている人々に会ったの



★農シタ★

大原健士郎 (24 回生)
「ここらの休憩室」

亜紀書房 一六八 円 2004.09

黒鉄ロジック (41 回生)

「新渡戸「武士道」が本当によくなる本」(監修)
東邦出版 一四七 円 2004.09

「ぼんぶくりん 亀之巻」(絵)

PT 研究所 一 円 2004.06

倉橋田美子 (29 回生)

「バルタイ」
新潮社 四一 円 2004.08

田島征三 (34 回生)

「でっかいぞでっかいぞ」
童心社 一八九 円 2004.10

「おぼけむら」

教育画劇 一三六五 円 2004.06

田島征彦 (34 回生)

「くべえとおへそ」
童心社 一四七 円 2004.05

西村繁男 (40 回生)

「雪むかえの村」
アリス館 一四七 円 2004.09

坂東真砂子 (51 回生)

「岐かれ路」
新潮社 一六八 円 2004.08

森岡浩 (55 回生)

「甲子園高校野球人名事典：選手・監督から審判・解説者まで」
東京堂出版 一五一 円 2004.07

高遠裕子 (60 回生)

「本場の力が目覚める魔法のコーチング」
日経BP社 一四七 円 2004.05

「必ず伸びる会社の10の習慣：すぐに実行できる利益と成長の法則」

日本経済新聞社 一六八 円 2004.05

鍋島高明 (30 回生)

「マンガ日本相場所師列伝：是川銀蔵・田中平八・佐藤和二郎・雨宮敬次郎」
ハンローリング 一八九 円 2004.10

高山宏 (42 回生)

「魔術事典」
あすなる書房 二二 円 2004.10

「ここからは雑誌に掲載されています」

大原健士郎 (24 回生)

「壮年期男性の自殺には兆候が必ずある：不況だけでは片づかない自殺事情」
論壇 108 68-73 2004

「こたいじや」(文庫春秋)

「公文俊平 (28 回生)」
学際書架 自著を語る私のネットワーク
学際 12 98-102 2004

「学際書架 自著を語る私のネットワーク」

「学際 12 98-102 2004」

「臼杵方式、確立に心血注ぎ最終局面へ」
「二一」リダー 17(5) 40-44 2004

「地方のリリーダーが日本を変える(14) 田中康夫 長野県知事 物議を醸し続ける「長野モデル」は正念場」
「二一」リダー 17(4) 42-46 2004

「竹内靖雄 (28 回生)」
「政治家は「インス」を善用するなかれ」
現代 38(5) 193-200 2004

「野田正彰 (37 回生)」
「絶対矛盾の自己同一化」の自衛隊」
世界 732 増刊 117-120 2004

「陳真：戦争と平和の旅路(最終回)」
世界 728 300-312 2004

「陳真：戦争と平和の旅路(4)」
世界 727 236-248 2004

「陳真：戦争と平和の旅路(3)」
世界 726 275-287 2004

「暴力が匿されて行われる社会」
母の友 615 99-104 2004

「座談会 本邦の自己責任」
婦人之友 98(8) 54-67 2004

「鼎談 教育をめぐる現状、何の問題か」
法学三十三号 49(7) 31-37 2004

「第10回小学館ノンフィクション大賞」
「クシモン」の十年」
本の窓 27(4) 30-33 2004

「精神医療と犯罪」
フォーラム現代社会学 3 42-45 2004

「味覚・嗅覚の異常と口腔内の体感異変」
老年精神医学雑誌 15(3) 299-305 2004

「激動の都立大よりカタケリヤいって来たかな」
「アリス・アマトリア論」
トリイカ 36(3) 160-180 2004

「クリティックな「プー」」
「A・A・ミルン」
「プー」
トリイカ 36(1) 61-71 2004

「書目「キョク」」
文学 5(3) 111-119 2004

「森岡正博 (52 回生)」
「論究 新しい自分の創造：「無痛文明」批判序説」
第三文明 529 30-33 2004

「無痛文明に負けるな」
「身体欲望」を「生命の欲望」に変えよ」
中央公論 119(1) 244-254 2004

「尾池和夫 (34 回生)」
「21世紀のコンピュータプログラムの意義と問題点」
科学 74(4) 508-512 2004